

『せ わ 焼 草』

最近、俳書の影印本や複製本がしばしば出版されるようになった。この種の書物は、学術資料の常として、需要は必ずしも多くないが、近世俳諧の研究には不可欠のものであるから、研究者にとつては大変ありがたい。米谷巖氏の近著『せわ焼草』も、その種の一冊である。編者の人柄がにじみ出たような、地味で堅実な本である。

『せわ焼草』（一名『世話尽』、『世話焼』とも）五巻五冊は、土佐国田高寺の住職空願（併号皆虚）の原著である。承応三年（一六五四）自跋、二年後の明暦二年（一六五六）に出版された。板元は「寺町二条下ル丁、西田庄兵衛板行」（初板本）、「野田庄右衛門」（再板本）である。その原本は、第一巻および第二巻が部類別俳諧用語集、第三巻が「いろは別」付合語辞典、第四巻が俳諧作法便覧、第五巻が回文詞および自撰句集となっている。この原本ぜんぶを鮮明な影印で示したのが、本書の主要部分（二六二ページ、七割強）であつて、そのあとに、米谷氏が蘊蓄を傾けた「解説」と、苦心の成果なる「索引」（合わせて約一〇〇ページ、三割弱）が付く。

『せわ焼草』は、実用書としての性質上、現存の完本が少い上に、原表紙や原題簽が剝落または磨滅して、書名を定めるにも少なからぬ苦勞があつたようである。諸本の調査も詳細になされているが、初板本のうちで刷りの最も鮮明な国立国会図書館蔵本を選んで底本としている。そのお蔭で、われわれは現存諸本中の最善の美本を、影印で容易に利用することが出来るようになった。しかも巻末には「せわ焼草俳言索引」^{【毛吹草】}対照せわ焼草付合見出語索引」という二種類の索引が付してあるので、利用者にはすこぶる便利である。

『せわ焼草』についての米谷氏の解説は、簡にして要を得たもので、特にその「二、内容」の項は、『無言抄』『はなひ草』『俳諧初学抄』『毛吹草』等の先行書と比較して、『せわ焼草』の長短を具体的に論じている。『せわ焼草』がこれら先行書をタネ本としてどのように利用し、またそれらにない独自の内容をどのように付加していったか、という編集意図・編集手法をあざやかに説明してみせるところは見事である。こうした地味な比

較・考証作業の結果、『せわ焼草』の資料的価値が確定する。

そもそも近世俳諧資料は、単に「五・七・五」の集積というだけでなく、当時の時代語・俗語・流行語・生活習慣等を知るための宝庫でもあり、同時代にあっては洒落た表現を学ぶためのテキストでもあつた。殊に初期貞門時代の啓蒙的な一連の作法書は、表現辞典・類語辞典・連想語辞典・故事ことわざ辞典などの多面的な性格を備えている。かつて藤井乙男博士著『諺の研究』（昭和四年刊）の巻末に『せわ焼草』の第二巻「曳言」の部が収録されて以来、『せわ焼草』（世話尽）といえど専ら諺の資料として通っている観があるが、それはあくまで一面であつて、本来は俳諧創作のハンドブック、表現辞典なのである。索引まで整備された現在、これを俳諧研究のために十分活用すべきは勿論であるが、同時に国語学・国語教育の専攻の方々へも吹聴し、ご利用をすすめる次第である。

かつて米谷氏は「天ざる土佐に五年」の日々を過ごした間、かの地が生んだ燕石とか皆虚とかいう貞門俳人の事蹟や作品について丹念な調査をし、注目すべき業績をあげられた。本書は、それらの延長線上に繪つた、見事な収獲である。心から敬意を表する。（昭和五一年三月、ゆまに書房刊、A五判、三七四ページ、四五〇〇円）（檀上正孝）